

書 評

信田敏宏、『周縁を生きる人びと：オラン・アスリの開発とイスラーム化』（京都大学東南アジア研究所地域研究叢書15）京都大学学術出版会，2004年，viii+472p.

本書は、マレーシア、ヌグリ・スンビラン州に暮らすオラン・アスリと呼ばれる人々（そのなかでもトゥムアンと範疇化される人々）にかんする詳細な民族誌である。マレーシアの総人口およそ2,400万人のなかで1パーセントにも満たない（p.24）オラン・アスリは、植民地時代から今日に至るまでマレーシア社会の周縁的な位置に置かれてきた。しかも彼らは、対共産ゲリラ対策として、あるいは国家形成という目的のなかで、その時々政府側の思惑により、つねに取り込まれる対象として取り扱われてきた。このような状況にたいして、本書は、オラン・アスリの集落の1つであるドリアン・タワール村（仮名）を舞台としながら、大きな時代の力に立ち向かう人々の姿を、綿密なフィールド調査と明確な問題設定のなかに、つねに彼ら側の視点に立って描き出している。

書評の常として500頁近くにおよぶ著作をあえて強引に要約すると、およそ次のようになる。まず全3部からなる構成のなかで、第1部では、オラン・アスリの歴史やオラン・アスリにたいする政策が、マレーシア国家との関連において論じられる。オラン・アスリに向けられた1970年代以降の開発政策

も1990年代後半から加速されたイスラーム化（イスラームへの改宗）政策も、いずれも国民国家の周縁に位置する彼らを同化／馴化しようとする過程にはかならない。

第2部では、本書の舞台となるドリアン・タワール村（人口約400人）の詳細が、開発やイスラーム化にたいする彼らの対応を軸に描かれる。彼らにたいする開発政策は、開発の恩恵を受けることができたアダット・リーダーに連なる人々とそうではない人々とに村を二分させた（前者は経済力のみならず村内の各家々の地理的配置からも「上の人々」と呼ばれている）。一方、近年に開始されたイスラーム化は、「豊かになった」ムスリムのオラン・アスリ創出という政府が当初抱いていた意図とは裏腹に、開発の恩恵を受けない人々（村では「下の人々」と呼ばれる）を中心に進んでいった。「上の人々」はオラン・アスリとしてのアイデンティティを守るために、イスラーム化に抵抗し、彼らが言うところのアダット（伝統）にしたがうことを選んだのである。

第3部では、国家主導のイスラーム化にたいするオラン・アスリ側の抵抗が、インセスト、結婚、離婚などの村での日常的な出来事をもとに分析される。村におけるイスラーム改宗者の増加は「従来の村の社会秩序に深刻な影響を与えている」（p.254）のものであり、いずれの出来事も、村内ポリティックス（「上の人々」と「下の人々」、さらには「上の人々」同士）と連動しながらイスラーム対アダットという図式のなかで処理（処理されないままにすることも含めて）されていく。

そのさい、村での主導的立場にいる「上の人々」は、非イスラーム性を帯びた対抗言説としてアダットをもちいることによって従来の秩序と自らの権力を維持しようとするのである。

本書の特筆すべき点は、次のような3点にまとめることができる。第1に、著者のフィールドワークをとおしてイスラーム化の渦中に置かれたドリアン・タワール村が、その歴史的経過と現在の社会状況の両面において、細部にわたって描かれていることである。開発プロジェクトを受け入れる者と逆に開発の過程でさらに周縁化されていく者、イスラーム化に抵抗する者とイスラーム化を受け入れる者などなど、村人ひとりひとりにまでおよぶ丹念な資料提示によって、オラン・アスリ社会の「現実」が余すことなく論じられている。本書が「オラン・アスリのイスラーム化についての第一次的な歴史資料となるにちがいない」(p.19)という著者の思いは十分に達成されているといえよう。

第2に、そのようなオラン・アスリ社会の「現実」提示が、彼ら自身の主体的な言説や行動に即してなされている点である。著者も触れているように、これまでオラン・アスリは国家政策や時代に翻弄される存在という構図でとらえられ、研究対象としてつねに「客体化」の視線にさらされてきた。近年ようやくそれを乗り越えるような試みがはじめられてはいるが、マレーシア国家における彼らの圧倒的な少数性と周縁性によって、その試みはまだ緒についたばかりであるといって過言ではない。本書はオラン・アスリ研究の現時

点でのひとつの到達点であり、同時に新たな出発点ともなるものであろう。

第3に、イスラーム化、とりわけオラン・アスリへのイスラーム布教という、マレーシアのなかでは微妙な問題をはらむものであるがゆえにあまり取り上げられてこなかった主題にたいして、あえて正面から挑んだことである。とくにイスラーム化「される側」からとらえたイスラーム化過程の研究は他に例をみないと言ってよい。イスラーム化が実は国民統合を意図した「マレー化(マレー人への同化)」の推進にほかならず、改宗に抵抗するオラン・アスリはそのような国家による強制そのものにたいして反発しているのだという著者の主張は、民族誌的綿密さに裏打ちされたものであるだけにきわめて説得的である。

ところで以上のような点を十分に評価したうえで、評者としての若干のコメントをあげておきたい。本書がその民族誌としての詳細さを保ちながらも論旨が明解なのは、言うまでもなく本書の骨組みが揺るぎなく一貫しているからである。それは一言でまとめれば、「森の民」たるオラン・アスリと彼らにたいして開発やイスラーム化を進める「政府」、ドリアン・タワール村における「上の人々」と「下の人々」、アダットにアイデンティティを求める人々とイスラームに改宗する人々などなどの、さまざまに交錯する対立的な図式として求めることができよう。

しかしこの明解な図式にそった整理が、現実の複雑さに別の観点からの問いを投げかける可能性を妨げてはいないだろうか。た

たとえばイスラーム改宗者とそうではない者との間での離婚騒動において、「タラッ・ティガ (*talak tiga*)」と呼ばれる再婚不可能な離婚が「村のアダットに従って執行され」(p.337)た。オラン・アスリのイスラーム知識の有無はともかく、3 (*tiga*) 度の離婚宣言 (*talaq*) によってなされた離婚が取り消し不可能であるのは、まぎれもなくイスラーム教義（ならびにマレーシア各州のイスラーム家族法条例の規定）と同一である。つまりこの事実から読みとれるのは、オラン・アスリが非イスラーム的なものとして考える自らのアダットにはすでにイスラーム的な要素が取り込まれているということであり、彼らの意識は別にして、アダットとイスラームとの実体的な区別がはたしてどの程度有効性をもって語りうるのかという点にほかならない。

著者自身も離婚や再婚についてのアダットにイスラーム起源の要素があることを示唆している (pp.345-346)。しかしオラン・アスリ（とくに「上の人々」）が抵抗の戦略としてもちいるアダットをイスラームとの対比において強調するあまり、アイデンティティ保持のための戦略言説という域を超えて、アダットを非イスラーム的な実体として想定してしまうような危険性はあるはしないだろうか。本書はオラン・アスリのアダットを直接の研究対象とするものではないし、その意味で評者のコメントは的を射たものではないのかもしれない。ただ著者のアダット理解は、アダットとイスラームを明確に区別したい（あるいは区別する必要のある）人々（つまり「上の人々」）のアダット認識の影響をやや強く受

けすぎているということはないだろうか。

最後に本書にたいする感想を述べたい。それは本書のキーワードのひとつでもあるアイデンティティというものにたいするとらえかたについてである。もしオラン・アスリのアイデンティティを固定的にとらえれば、イスラームに改宗した人々はそれを失った者であり、圧倒的力のもとで国家が主導するイスラーム化の前にいかにオラン・アスリとしてのアイデンティティを回復するかという、まさに本書で著者が描き出した物語が成立する。ところが、アイデンティティをその時々において個々人によって構築されていくものとしてとらえるならば、イスラームに改宗した者も、彼（あるいは彼女）のアイデンティティを、所与の条件やそれぞれの経験、利用可能な要素等によってつねに構築、更新していると考えられることもできるはずである。その場合、イスラーム化への抵抗を試みる者、改宗した者、あるいは街へ出ていくことを選んだ者などなど、個々の人間のなかにその数だけアイデンティティは存在すると言えよう。本書を読んでまず感じたのは、アイデンティティのとらえかたそのもののなかに、著者が抱くオラン・アスリについてのイメージ（それはフィールドの人々への共感でもあろう）が反映されているのではなかろうかというものであった。都会に出てきても樹木や植物に目がいくオラン・アスリという著者が紹介する小さなエピソード (p.38) に、ロマン化されたオラン・アスリ観（感）を感じてしまうのは感想としてはうがちすぎであらうか。もちろんだからといって、オラン・アスリの側

からイスラーム化への抵抗を描き出したという本書にたいする評価が少しも減じるものではないことは言うまでもない。

(多和田裕司, 大阪市立大学大学院文学研究科)

藤田幸一, 『バングラデシュ 農村開発のなかの階層変動: 貧困削減のための基礎研究』(京都大学東南アジア研究所地域研究叢書 16) 京都大学学術出版会, 2005 年, iii+287p.

本書は, バングラデシュ農村開発に関わる諸問題を地道なフィールドワークに基づき分析し, 現段階までの成長の到達点を示すと同時に, 今後の展望について新たな視座を与えた意欲的な著書である。フィールドワークのメリットを最大限に生かした研究成果であるだけに, バングラデシュの農村開発やこれに関連した援助政策について, 「通説」とは異なった問題指摘が小気味よく説得的に展開されるなど興味深い内容となっている。

以下の本書の構成に沿って, その内容を紹介していこう。

序章 開発と農村開発変動—課題と方法—
第1章 バングラデシュの経済発展と農村変容

(第Ⅰ部 「緑の革命」と農村階層)

第2章 灌漑地下水市場の形成と所得配分—「水主」の出現をめぐる—

第3章 1990年代における灌漑地下水市場の変容

第4章 インド・西ベンガル州の灌漑と農

業発展—地下水位低下と新型管井戸の導入—

(第Ⅱ部 農村階層変動と金融)

第5章 農村インフォーマル金融の階層間「逆流」

補論 マイクロ・クレジットの虚像と実相

第6章 馬鈴薯流通システムの変容と金融
(第Ⅲ部 インフラと政府・農村社会)

第7章 インフラ整備事業をめぐる地方行政と村落社会・農村階層

終章 総括

序章で本書の課題と方法を提示したのち,

第1章では, マクロレベルでのバングラデシュの経済発展の過程を整理して, 第Ⅰ部から第Ⅲ部において議論が展開される1980年代以降の特徴を以下のように示している。

バングラデシュは, 「絶対的貧困の構造」あるいは「停滞のアジア」の典型例として, しばしば語られてきた。ところが, 1980年代には農業部門が顕著な成長を遂げ, 食料(コメ)自給を達成し, 国民の大半が居住する農村地域の経済の底上げが進んだ。貧困緩和の進展に伴い, その消費財購買力にも相当の向上がみられた。1990年代の本格的な高度成長の兆しは, こうした基盤形成のうえにはじめて可能であった。

筆者は, 途上国の経済発展過程, 特にその初期段階において, 農業部門の成長が決定的に重要な役割を果たすという基礎的な立場をとっており, まずもって, バングラデシュでは「緑の革命」が1980年代以降に急速に展開したことに注目しているのである。

第Ⅰ部(第2章～第4章)は, かかる農業

成長の原動力となった技術革新の展開とその下での農村階層の動向を追跡している。農業成長は、具体的には乾期における灌漑稲作の大幅な拡大によるところが大きかった。ところで、灌漑稲作の普及は個別の農民が投資主体となって管井戸灌漑施設の整備を進めていったことによるものであり、大規模な投資を要する河川灌漑とは異なる灌漑技術の特殊性が存在する。これが、バングラデシュにおける農業成長が、農業構造の大きな変革なしに生じた背景となっている。

管井戸投資の主体は一部の富農層であるが、これを所有しない大多数の中小農民も「売水」によってその恩恵にあずかることになった。そこで問題となるのが「水市場」の機能が如何に発揮されるのかである。

第2章では、アエラ村調査（1992年）に基づく、灌漑地下水市場の分析を行っている。

同村では、STW（浅管井戸）の急速な普及によって、従来の雨期稲作一作（移植アモン）からこれに乾期稲作（ボロ）が加わった稲二期作が主要な作付体系として定着した。STWの大半は2.5エーカー以上層が所有しており、「水主」からみた灌漑の在り方は、① STW 所有者自作、② 乾期のみ借地、③ 売水に分かれる（③はさらに分益制、現金定額制、折衷型の3種）。

STW 投資に対する収益率は69%と推計され、長期小作制度（カイラカシ）の実質利回り50%前後を大きく上回る水準である。また、ボロの費用構成からみて、資本分配率が23%、土地分配率が22%となっており、従前の移植アモンはそれぞれ7%、52%であ

る。このことは、ボロの拡大によって資本の経済価値が上昇したことを意味している（逆に土地の重要性は相対的に低下）。このため、土地なし労働者や下層農にもSTWを購入したり、STW所有者に運転資本を高利貸しして資本利子を楽しむなどを通じて、上向きのチャンスが拡大したと指摘している。特に、農外就業機会が豊富な村では、下層による資本蓄積がある程度可能になり、そうしたなかで「緑の革命」が両極分解とは逆の階層変動を促進する契機にもなり得たのである。

第3章では、1990年代当初で管井戸は飽和状態に達したとして、飽和後の水市場の変容とその結果として所得配分がいかに変化したかが分析されている。

ティトクル村調査（1999年）によれば、STWの損益分岐点は灌漑面積が9エーカー強と推計されるが、STWの平均稼働は6.1エーカーと低い水準にとどまっている。管井戸の新規投資は収益性の高さによるものであったが、なぜ大半が赤字経営に陥るまで、新規投資が続いたのか。その原因として、赤字経営の多くは、既存の管井戸の灌漑区域に無理に新規参入したものであることを明らかにしている。

灌漑畑作物の追加栽培などで、赤字の多くは補填できたと考えれば、個人レベルでは合理的である可能性が高い。しかし、次の問題は片づかない。新規参入側は既存の所有者がきちんと配水してくれないからやむなく自己投資したと主張する。これに対して所有者側は買水農民が水利料の支払いはきちんとしない傾向があると反論する。低い土地の地主

は、自然と灌漑水が周辺から流入してくるといふ、灌漑の外部性に関連するフリー・ライダー問題が存在する。こうした配水の「質」の低さと水利料の支払い意志の弱さは相互規定的であり、両者は悪循環構造にある。

さらに根本的な問題は、このような非協調的行動が生じた場合に、妥協点を求めて調整を行う制度化された場が歴史を通じて農村社会のなかに生まれることがなかったという事実にある。

こうした「飽和」状況のなかで、ボロについて水利料の対生産額シェアは13%であり、92年のアエラ村の33-40%（分益の場合）と比較してかなり低い水準となっている。また純収益の対粗生産額シェアは49%にまで増加している。地代が再び急上昇したことになるが、管井戸所有者の多くが富農（大地主）であるから、彼らにとっての配分は大きく変化しない。一方で、管井戸を所有しない自作農にとっては手取りが大幅に増加したことになる。

第4章では、インド・西ベンガル州においてバングラデシュと同様に進展している灌漑開発の実態とその下での農業・農村の変容の過程をゴントラ村調査（2000年）に基づき分析している。

同村でも1990年代初頭までにSTWが普及し乾期ボロが村全域に拡大した。しかし、これもバングラデシュと同様に、管井戸の「乱立」に伴う1基あたりの灌漑面積の縮小によって、STWは総じて赤字の状況であった。バングラデシュと異なる状況は、揚水不足によって、STWからより深い地下水を汲

み上げることができるSM（灌漑能力はSTWの3倍）への移行という調整過程にある点だが、それに伴って必要となる相互調整を管井戸所有者や指導者が音頭をとって行おうとする動きはほとんどない。

いずれにしても、1980年代以降、停滞色の濃かった東部インドにおける農業発展、特に稲作部門発展の最大要因は農民が個人営で実施した管井戸掘削による灌漑地下水開発にあった。こうした実態を確認しつつ、ここではかかる発展が農地改革（農地再配分や小作権強化政策）や地方行政の成果とする「通説」への反論を試みている。「水主」という新たな支配階級の存在は通説では許し難いものであるが、かかる通説は管井戸による灌漑水取引の実態を踏まえたものではない。

水利料が管井戸経営を圧迫するほどに低下している状況において、緑の革命の恩恵は、買水して灌漑農業を営んでいる農民に十分に裨益しているからである。さらに、この村における稲作農業の労働配分率は高く、このことから緑の革命の恩恵は下層農民ばかりか、土地なし労働者層にまでかなり裨益していると考えられる。

第Ⅱ部（第5章、補論、第6章）では、農村階層変動と金融の問題に接近している。

バングラデシュにおける農村向けフォーマル金融は、1980年代の銀行や協同組合を主役とする金融の破綻を受け、NGOを中心とするマイクロ・クレジットの隆盛が本格化している。しかし、なおもって農村の資金調達的主流はインフォーマル金融によるものである。

インフォーマル金融について「通説」では、貸し手は村の地主や上層農で、借り手は下層農、小作農や土地なし労働者が想定され、そこで成立している高金利が後者の貧困からの脱出を妨げ、また農民層分解を促進する有力な要因であるとする。

第5章ではこうした通説への批判を試みている。ドッキンチャムリア村、アエラ村の2つの村を対象としたインフォーマル金融の実態調査（1992年）によれば、両村とも農地用益の移転を伴う長期金融が金額ベースで圧倒的シェアを占めている。そして、いずれも土地所有規模別にみて、土地なし世帯と0.5エーカー未満の零細層の下位層が貸付超（黒字主体）であり、0.5エーカー以上層が借入超（赤字主体）となっている。上層の資金使途は、管井戸の運転資金をはじめ、その他農産物流通に関わる小商売などの運転資金としての需要が多い。

つまり、インフォーマル金融の貸し手と借り手の「逆流」が生じているのである。貧困層である下層に少なからぬ貯蓄余力が生まれ、それが富裕層である上層に向けて高金利で貸し付けられている。こうした金融フローが生じている背景には、稲作部門の技術革新とコメの飛躍的増産による基底的な農村経済の変化がある。すなわち、農業内部での雇用の増加（二期作により雇用は少なくとも2倍に）、「緑の革命」による産業連関効果や支出効果を通じて農村内の非農業セクターの発展を刺激して雇用増（道路整備などのインフラ整備）等、下層への均霑効果である。

ただし、下層の経済状況の格段の改善を意

味するものではない。インフォーマル金融の大部分が農地収益権の獲得を伴う長期金融であり、これは、下層による飯米確保の重要戦略である。家計にやや余裕が出てきた段階で日雇い賃金による飯米確保という不安定な状況の改善を目指したものである。下層は、なおもって雨天用の料理小屋すらない、あってもベッドがない世帯という実態もあわせて明らかにしている。

こうして、「緑の革命」を原動力とする経済発展に伴って、自立的な農村金融市場が政策担当者の預かり知らないところで生まれ、機能をしはじめたのである。それは高利ではあるが、ともかくも資金需要は満たされ、また余剰資金も行き場を失わずに済んだ。かかる動向を踏まえて、筆者は最貧国バングラデシュの農村金融政策においてさえも、貯蓄動員という供給面がもっと重視されるべき、と結んでいる。

補論では、バングラデシュの農村を席卷しているマイクロ・クレジット（グラミン銀行）に焦点をあて、その虚像と実相を明らかにしようとしている。

ドッキンチャムリア村調査（1992年）に基づき、以下の実態が明らかにされている。本来、グラミン銀行が目的としている生産的投資の資金割合は5割程度に過ぎず、生産的投資であってもグラミン銀行のメンバーである主婦の活動はほとんどなく、機織、輸送など男性の仕事が多い。また、女性が伝統的生業として行ってきた加工・製造業を中心とする事業は押しなべて収益率が低く、マイナスとなることも多い。したがって、それが政策

的な意図である生活向上プロジェクトに投資されていると考えるのは、かなり困難である。

グラミン銀行の投資先として比重が高い、土地の質受け（グラミン銀行から借りた資金を地主に転貸して土地の耕作権を確保）に注目すると、この貸付主体は下層農であり、下層から上層への資金の流れを形成している。ただし、こうした流れは、基本的にグラミン銀行の介入とは無関係に生じた現象とみるべきである。

マイクロ・クレジットが貧困緩和の経路として機能しているのは、ローンが「貯蓄のための前貸し」としての役割を果たし、貧困世帯の特に男性に「勤儉貯蓄」の習慣を身につけさせたことである。マイクロ・クレジットに経済成長を先導していくような役割は期待できず、むしろ順調な経済成長のもとで、その成果を下層により多く均霑させる手段としての有効性を認めるべきである。

第6章では、馬鈴薯流通に焦点を当て商業資本と金融との関連について分析している。

馬鈴薯は、経済発展と都市化の進展のなかで、食生活上の地位を高めてきた。特に、消費が周年化する傾向に伴って、季節間の価格が偏差が生じ、冷蔵出荷を行うことが大きな経済的利益の獲得チャンスとなっている。

冷凍倉庫の所有者は都市企業家であり、ここで問題となるのは、こうした資本所有者による農産物流通過程の支配の実態とその変容である。

調査対象となったアシヨラ村（2000年）では、海外出稼ぎを含む農外就業機会が多く、農村低所得層は「脱農」傾向を深めてい

る。彼らの一部は農外就業で蓄積した資本を投下して質や小作制度を通じて農地を取得する傾向がある。ここでも、インフォーマル金融の階層間フローについて、農地を質とする長期金融（ボンドク）は、はっきり、下層から上層に向かっており、階層間「逆流」が観察される。

冷蔵・流通ビジネスをリスクを背負って担っているのは、上層農家でもある商人である。彼らは、冷凍倉庫からの低利融資制度を利用して、相対的に少ない自己資本で営業しており、運転資金の不足分はインフォーマル金融で確保している。

1980年代と比較して、冷凍倉庫を保有する都市企業家の経済支配力は低下しているといえる。農民は経済力の底上げが進み、馬鈴薯商人から前渡しを受ける必要がなくなったばかりでなく、土地なしや小農世帯はむしろ、農外就業などで蓄積した余剰資金をボンドクで貸し付け、中農・大農から農地を取得する側に回っているからである。また、冷蔵・流通投資の担い手としての商人が成長し、冷凍倉庫間の競争も激化している。

第Ⅲ部（第7章、終章）では、インフラ整備の動向を政府・農村社会との関連で分析するとともに、本書全体の総括を行っている。

第7章では、小規模農村インフラの供給や維持・管理をめぐる（末端）行政と村落との接点の問題について、アエラ村（1993年調査）を素材としながら、村落側からのアプローチを中心とした検討を行っている。

地方政府（郡）レベルで企画・実施できる事業として、援助小麦を現物資金とする土木

事業があり、それぞれ実施委員会が設置されている。しかし、委員はユニオン（行政村）評議会の議員が名を連ね政治的利権としての性格が強く、インフラ事業のニーズを草の根から行政ルートを通じて汲み上げるような仕組みが整備されていない。不正による小麦の脱漏も激しい。

たとえ、村の有力者が委員として出ていても、事業は村の総意から出たものとはいえない。そもそも紛争調停以外には「寄合い」が存在していない。また、事業負担の一部を受益者住民から労働徴発の形などで徴用する発想もない。住民参加型ではないのである。また、1名の書記官がユニオンの事務を担当しており、農村住民から徴収すべきユニオン税は慢性的に滞納され開発予算まで回すことができないといった状況からみて、行政村の機能は弱体である。

一方、アエラ村（自然村）の内部に注目してみると、村独自の資源動員（寄付や労働提供など）により公共施設の整備が行われ、自主的にそれらを運営する委員会も置かれている。しかし、このような取組も、それらがほぼ宗教に関連した事業に限定され、動員率が低く、寄進された農地以外に共同財産がないといった限界をもっている。かかる限界を乗り越えられるかの「実験」と位置づけられるのが、「村が盛り土作業に責任を持つ」という条件つきで破損した道路改修費の一部を負担することを提案した JICA プロジェクトであった。この事業の遂行がいかに困難であったかをみれば、資源動員システムとそれに基づく地域公共財の供給および維持・管理体制

の構築には、大きな限界があるといわざるを得ない。

このように「堅牢」でない村落構造は、強力で効率的な行政村の定着を阻む一因となり、さらに、そういう行政村の定着の困難性が「捉えどころのない」村落構造を再生産し、両者が悪循環を起こしたまま現在に至ったのではないかと指摘している。

終章ではこうしたインフラ整備の問題に再び触れて、以下のように述べている。今後の経済発展に向けて、公共財整備が必要とされるが、市場にその供給を任せることができない。行政組織の役割が重要なのであるが、地方行政や村落社会がその体をなしておらず、貧相な行政組織の問題は深刻な重要性を帯びている。マイクロ・クレジットに偏重した政策対応では、かかる長期的な重要課題を看過してしまう恐れがある。以上が、本書の概要である。

特に、バングラデシュの農業・農村に触れたことのない評者のような立場の者からすれば、本書の実態調査結果の詳細なとりまとめ内容をフォローすることはやや骨の折れる仕事ではある。しかし、本書がフィールドワークにこだわった研究成果であるだけに、バングラデシュ農業・農村の実像を少なからず伝えてくれる良書であることは間違いないだろう。本書のフィールドワークは、単なる個別事例にとどまるものではなく、筆者が調査した他の村との比較や先行研究との対照を踏まえた検討が行われており、調査村の位置づけについての目配りには怠りがない。

それにつけても、本書を読んで考えさせら

れるのは、アジアのなかでも「絶対的貧困の構造」をもつとされたバングラデシュにおいて、農業成長を基礎とした経済発展の可能性が膨らんでいるという実態と、そうしたアジアの発展とは対照的なサブサハラ・アフリカの存在である。農業発展における灌漑稲作の威力を改めて認識させられたのは評者だけではないであろう。

ところで、本書は、3部構成となっているが、そうした章別構成の相互の関連についてどのように考えたらよいのだろうか。この点に関して、必ずしも明示的ではないように思われる。評者なりに、整理すれば、以下のようになる。

第Ⅰ部は、灌漑稲作を中心とする農業成長とその下での階層変動を取り上げており、緑の革命が進展するほど、水利料の低下や農村雇用機会の増加などがあり、両極分化とは逆の階層分化の作用が現れてくる。ここでは経済発展の原動力としての農業生産力の高まりと、その均霑化作用が描き出されている。

第Ⅱ部は、こうした農業発展下での階層変動の動向を農村金融フローの実態から捉えている。ここでは、金融の役割は、生産拡大の呼び水としての初期投資の役割は必ずしも強調されておらず、第Ⅰ部でみたような農業成長によって、下層農家の資金余剰が上層農家と逆流していることが明らかにされている。上層農家が借り受けた資金は、管井戸の運転資金や農産物流通業などに充当されているのであるから、かかる資金循環を通じて、やはり下層農家への均霑化作用が生じている。これに加えて第Ⅱ部では、農村諸階層の生活水

準に関する検討が加えられており、なおもって、下層の生活水準は十分とはいえない実態が描かれている。

第Ⅲ部は、さらに経済成長を推し進めるための有力な手段としてインフラ整備の問題が取り上げられている。この場合には、自由市場にその供給を任せられないだけに、地方行政や村落社会の在り方が重要であるが、それらが体をなしていないというやや悲観的な結論にたどり着く。

こうした流れからみて、第Ⅰ部から第Ⅲ部に向かって、それぞれ中心的な課題が、前段の経過を受けて展開するところとなっており、あわせて、検討の対象が重複しながらも、より広範なものとなっていくことがわかる。

著者が、「あとがき」で、自らの研究史を振り返り、フィールドワークの限界を感じているとも感じられる記述とあわせ、今後は理論的ないし普遍性を求める研究に力を注ぎたいという指摘をしているが、それはこうした流れの延長にあるのではないだろうか。

著者の新たなる途上国開発研究にいつそうの期待を寄せるものである。

(香月敏孝、農林水産省農林水産政策研究所)

野元美佐.『アフリカ都市の民族誌：カメルーンの「商人」バミレケのカネと故郷』（初版）明石書店、2005年、310p.

本書は、アフリカ都市居住者が、どのように生活し、人間関係を築き、故郷との関係を

維持するのかを、カメルーンの「商業の民」バミレケによる貨幣の「回し方」に着目してダイナミックに描き出した民族誌である。著者である野元が、長期にわたるフィールドワークに基づき、バミレケの生き方や創造力に対する深い共感とともに書き上げた本書は、アフリカ都市世界を理解するうえでたいへん優れた民族誌と位置づけられる。また、経済人類学とアフリカ都市人類学で展開してきたそれぞれの議論を戦略的に交差させて論じることにより、双方の研究分野に新たな視点を提示することを目指した意欲的な論考である。

本書で示されるのは、すでに貨幣経済がふかく浸透したアフリカ都市社会において、ひとびとが貨幣を「飼いならす」ことで、ゆがみや困難をはらんだアフリカ都市社会を自分たちの生活世界へと転換していく姿である。それは、貨幣の動きを切り口として、アフリカにおける個人と共同体、伝統と近代、村落と都市という絡み合い、せめぎあう関係性を正面から解きほぐしていくところみでもある。

さて、都市居住者の生活戦術、都市において同郷者やエスニック・グループを基盤に築く共同体、都市居住者が村落の共同体と取り結ぶ関係といった本書の研究対象は、アフリカ都市人類学においてもっとも蓄積のある中心テーマである。そこでは、伝統的／部族的な行動様式と近代的／都市的な行動様式とを対置し、都市への空間的移動により前者から後者へ移行する「脱部族化モデル」、状況に応じて都市移住者が使い分ける「状況選択モ

デル」、前者の行動様式と社会関係を再編強化することで都市化や近代化に対応する「再部族化モデル」といったモデル化に代表されるように、都市―村落、近代―伝統というそれぞれの内容を固定し、二元化するさまざまな議論が展開してきた。しかし近年では、いずれの二元論図式も都市居住者の創造的な営みを無視するものとして批判的に検討されるようになった。野元も、都市化とともに進行する農村化や都市における伝統的要素の氾濫は、都市で生活するひとびとの必要性が生み出した新たな現実であり、都市居住者の論理として分析されるべきであると論じている。

しかし彼女の研究において注目すべき点は、こうした研究者がつくりあげた二元論図式を理念的に批判するにとどまらず、都市居住者みずからが再生産していく二分法に注目し、それを乗り越えていこうとする点にあるだろう。野元は、都市居住者自身によって二分された世界がどのように整合され、あるいは矛盾やゆがみが生み出されているのか、その実際的なメカニズムを、貨幣をめぐるひとびとの実践を手がかりに具体的に検討している。

アフリカ村落社会において富者から貧者への富の再分配を強要する規範が存在すること、これらの規範がその不履行に対する嫉妬や呪術という制裁を伴いながら、結果として富の平準化をもたらすことは広く知られている。こうした規範は、都市の資本主義市場で成功した商人にも及んでいるし、カメルーンでもっとも企業家精神が高いとされるバミレケ商人もその例外ではない。都市でカネを稼

ぎ、財を蓄積し、企業家として成功していくことと、共同体の再生産のための相互扶助のネットワークを維持し、再分配に応じていくことのあいだには、ジレンマがある。ではバミレケ商人たちは、どのようにして村落や共同体とつながりながらも、資本主義的性向を身につけ、企業家として商売を行っているのか。

このような問題意識のもとで、野元が批判的に援用した論考は、パリーとブロックが編集した *Money and the Morality of Exchange* である。この編著では9人の人類学者によって、ローカルなひとびとが貨幣をどのように「飼いならすか」、各地の事例が紹介されている。序章でパリーとブロックは、貨幣の動きを、個人の欲求を充たす「短期サイクル」と社会秩序や道徳を再生産するための「長期サイクル」という2つの領域に分けて分析した。そして非貨幣経済社会への貨幣のインパクトは、必ずしも個人主義の発達とモラル共同体の破壊を促すものではなく、ひとびとが自分たちのやり方で貨幣に意味を書き込んだり、意味を書き換えることをとおして、逆に共同体の再生産、社会秩序の維持に貢献することもあり得ると論じた。1989年に出版されたこの論考において、「短期サイクル」と「長期サイクル」という図式はひとつの静態モデルであった。これに対して、野元は「小規模な共同体にもっともよく当てはまるであろうこの図式をアフリカ都市社会という広い『共同体』に当てはめ」(p.25)、「短期サイクル」と「長期サイクル」の接合過程や前者から後者へ移行する動態的な軌跡を検討するこ

とで、アフリカ都市—村落関係に横たわるある種の「断絶」を明らかにするとともに、このモデルの限界を指摘することを目指した。

以下では、「短期サイクル」と「長期サイクル」というパラダイムの魅力と限界を踏まえて、野元が各章をどのように構成したのかを説明していきたい。

序章につづく第1章、第2章は、バミレケ都市移住民の背景を記述する部分となっている。第1章では、バミレケ移住民の故郷、バミレケ・ランドの首長制社会の概要と都市への歴史的な移住過程およびその要因が検討されている。本章で野元は、バミレケ・ランドからの移住が、植民地化による首長制社会内部の軋轢の過程、つまり資本主義と伝統社会との接合過程で生じたものであり、移住は単なる地理的移動にとどまらず、必然的に職業移動、社会移動を伴っていたことを指摘している。すなわちバミレケ・ランドからの脱出は、「農民」から企業家へと転身するための要件であったというのである。

第2章では都市移住後にバミレケが圧倒的な経済力をもって台頭し、不動産購入などをとおして都市化の進展に貢献していく「都市のバミレケ化」と、それゆえに／にもかかわらず、バミレケが他のエスニック・グループから反感を買い、政治領域から排斥され、「よそ者」としての立場を強いられていく過程が分析される。野元は、これらの分析を踏まえ、バミレケが都市で「よそ者」として生きることは、逆に移住先のモラル・エコノミーにそれほど縛られず、「自由に」商売していく条件となっていると主張する。

第3章からが本書の中心であり、いよいよバミレケの貨幣の回し方に焦点が当てられていくことになる。まずバミレケが金儲けに適した価値観、アイデンティティ、企業家精神をいかにパフォーマティブに獲得していくかが検討される。すなわち、資本主義的な性向やバミレケ・アイデンティティは所与の民族性ではなく、バミレケ個人々が、商売経験や、嫉妬など多様な感情を抱く他のエスニック・グループとの交渉をとおして、獲得していくものであることが明らかにされる。そのようにして獲得した価値観を基盤に、バミレケは貨幣の量を増やす方法として商売の技法を体得していくのである。ここで明らかにされるのは、個人的な利益の獲得を目指した短期サイクルでの貨幣の回し方に他ならない。

第4章では、貨幣の意味を変える貯蓄方法であるトンチン *tontine* とそれを機能させる同郷会を取り上げ、短期サイクルと長期サイクルの接合過程に焦点が当てられる。トンチンとは、一定規模の人が定期的にある金額を出資し、その総額を1人に与えることを繰り返し、順番にすべての人が受領するという頼母子講である。野元は、元来は個人的な貯蓄活動の一環であるトンチンが、なぜ社会的活動や相互扶助とみなされているかに注目する。そしてトンチンとは、長期的にみれば厳密な互酬性の成り立つ交換であるものの、一回一回の場では見返りを求めない「純粹贈与」であるかのようなフィクションを生み出す活動であること、それゆえひとびとはトンチンを相互扶助とみなすことを指摘した。すなわち、トンチンはひとびとに金儲けを強

制し、また個人的・利己的に稼いだカネはトンチンで「回され」、ひとたび集団のものとされることで、共有化されたカネへと変化する。このようなトンチンによる貨幣の意味の書き換えこそが、平等化圧力が強く、資本蓄積が難しいとされるカメルーンでバミレケがカネ儲けを正当化し、資本蓄積の場を獲得する方法になっていると論じるのである。

第5章では、貨幣の質を変化させる方法として、「死者祭宴」「村の家」「貴族の称号」の3つの事例が取り上げられている。バミレケ都市居住者は、都市で稼いだ貨幣を、死者祭宴での消費や村での家屋建設、貴族の称号の購入に投じる。野元によるとこれらの活動は、貨幣の価値を経済的なものから象徴的なものへと変化させる活動である。すなわち、利己的な金儲けや個人的成功を正当化するために、短期サイクルで稼いだ貨幣を伝統社会の再生産や社会秩序の維持を目的とする長期サイクルへと転換させる実践である。しかしながら、このような都市移住者による長期サイクルへの投資は、村の中の階層差を暴き、都市居住者との格差を露呈させることで、逆に村の社会秩序の破壊をひき起こす可能性ももっていた。その理由を野元は、都市移住者が再生産している秩序は、実際の故郷ではなく、都市生活の必要から創りだされた「ローカリティー」に過ぎないからであると議論する。すなわち彼らのカネの投資先は現実の村であるが、彼らが長期サイクルにおいて再生産している「故郷（ローカリティー）」は現実の故郷とはつながっていないというのだ。

以上みてきたように、野元はこの本で「短

期サイクル」と「長期サイクル」というパラダイムを主軸に据え、バミレケが企業家として貨幣の量を増やすために「稼ぎ」、稼いだ貨幣の意味を書き換えることで「貯蓄し」、貨幣の質を変化させ「投資する」という一連の貨幣の回し方を明快に論じた。そして、バミレケの都市住民は自らの論理に基づいて村落住民とつながることで、逆に両者のあいだに一定の距離を生み出していることを指摘した。これは「商業の民」と評されるバミレケのダイナミズムを明らかにするとともに、短期サイクルから長期サイクルへの象徴的な貨幣の意味の転換がじつは実際のレベルでの共同体の再生産とは整合していないという静態モデルの批判にもつながる視点であろう。

しかしながら、小さな共同体の研究で展開されてきたこのパラダイムをアフリカ都市社会という広い共同体に当てはめるときに、貨幣のもたらす影響と資本主義経済あるいはグローバル化の浸透がもつ影響とを混同してしまうと、より暴力的な後者の影響を見えにくくしてしまう危険性も秘めているように思われた。両者の差異をより慎重に扱うことで、あらゆる社会の多様な事例に当てはまるかのようにみえるこのパラダイムの限界をより明確にしうるのではないだろうか。

また貨幣という切り口を用いることで論旨が明快になった一方で、都市住民と村落住民が双方の生活世界を生きるうえで容易には整合しがたい実質的な折衝・交渉の文脈からは離れていく傾向も感じられた。都市と村落とのあいだを不定形ながらも確かに繋ぐ貨

幣のコンバージョンに、村落住民もしたたかに参加し、都市住民による貨幣の意味の転換に対抗しているのではないだろうか。また貧しい零細商人を対象に研究を行っている私には、野元の提示した論理とは多様な階層で活躍するバミレケのなかでも成功者の論理にもっとも整合しているという感じを抱いた。戦略的に貨幣を回すことが難しく、故郷や共同体との強い連携のなかでジレンマにどっぷりつかりながらも、変幻自在に日々を切り抜けている商人たちもいるのではないか。

もっともこれらの指摘は、野元自身も今後の課題としており、さらに重層的で錯綜的なバミレケの都市―村落関係の議論が展開されていくことだろう。本書がグローカリゼーションという安易な言葉で論じきれない、アフリカ都市商人の世界を見事に描き出し、アフリカ都市人類学、経済人類学それぞれに新しい視野を切り開いていることは間違いない。

引用文献

- Parry, J. and M. Bloch, eds. 1989. *Money and the Morality of Exchange*. Cambridge: Cambridge University Press.
(小川さやか、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)